
ドッペルゲンガー

赤峰智子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドッペルゲンガー

【Nコード】

N8044C

【作者名】

赤峰智子

【あらすじ】

高校2年の杉本亮太は、ある日自分の瞳に映る自分から話掛けられる。何と《自分に最善の選択を無償で教えてくれる》らしい。これ幸いと瞳の中の自分に従って生活を始める亮太。しかし、ある時出来心でその選択を無視してしまった亮太は…。全4回、起・承・転・結と載せる予定です。

第1話：【起】（前書き）

当方、女で地方在住の為、登場人物の台詞回しがクサクサかったりおかしかったりする所多々も有るかと思えます。どうぞご了承承願います。

第1話：【起】

「ちょっと、亮太！？いい加減に起きなさい！今何時だと思ってるの、もう8時よ！」

僕は母さんの声で跳び起きた。

時計を見ると7時58分。ヤバい、遅刻する！

急いで制服に着替え、鞆を持ってリビングへと駆け降りる。

朝ご飯なんか食べてる暇は無い。僕は牛乳を一杯飲んで、歯を磨いて顔を洗った。

石鹸で洗う余裕なんて無いから、今日だけは少し汚いけど水で洗うだけにしよう。

3

手荒くザバザバと洗って、ふと何気なしに顔を上げる。すると（当たり前前の話だが）そこには鏡に映った、水まみれの僕が顔があった。だが、何か違和感を感じるのだ。

『あれ……？何だろ、この感じ……』

「コラ！早くしないといけないのに、どこの誰が自分の顔に見とれてんの！？さっさとしなさいって……！」

母さんの地響きの様なデカい怒号で今置かれた状況を思い出した僕は、慌てて顔を拭き、髪も整えないままに家を飛び出した。

『そういえば、今日は朝のHRで大事な日本史のテストがあったんだ！』

僕は思い出して、走りながら歯を食いしばる。

そうするうち、さっき感じた違和感の事なんか、いつの間にかすっかり忘れてしまっていた。

「ただいま……」

僕はか細く呟いた。

本っ当に、今日は最悪な一日だった。朝の寝坊のせいでテストはロボロ、授業で使う数学のプリントも忘れ、おまけには弁当すら忘れてしまったのだ。

帰宅部の特権で、この散々痛めつけられた心と体を、放課後の部活で更に痛めつけられない事だけが唯一今日の救いである。

両親は共働きでその上僕は一人っ子なので、今家には誰も居ない。

……と言っても特にやる事も無いので、今日を乗り切った自分へのご褒美として帰りに買ってきた漫画を読もうとした。

『……つと、その前に汗かいたから顔だけ洗おう。朝石鹸で洗ってねーから汚いだろっし』

僕は制服を脱いでTシャツとジャージに着替え、リビングのクーラ

ーを入れてから洗面所へ向かった。

「あー、さっぱりした！」

僕は満足気に言った。メンソール入りの石鹸で顔を洗うと、物凄く気持ち良い。リビングに戻ればクーラーが効き始めているから、もっと涼しくなるだろう。

僕はそのままりビングに戻ろうとした。

そこでふと、今朝の違和感を思い出した。顔を鏡に近付け、まじまじと自分を眺める。

が、特に変わった様子はない。どこにでも居そうな、至って普通の顔の男が映ってるだけだ。

『特に何もねーよなあ……』

と、僕が思った瞬間！

聞き覚えの有る声が頭に響いた。

《…間抜けなツラしやがって》

「えっ!？」

僕は辺りを見渡す。

しかしそこには僕しか居ない。

……
《俺だよ、俺。もっかい鏡見てみるよ、この間抜け顔》
……

僕は驚きのあまり、脱力した丸つきりアホの子の顔をしながら鏡に近付いた。

……
《目、良く見てみる》
……

僕は鼻が鏡に付くのも構わず左目を凝視した。

「お前は俺だけど、お前はお前……って、じゃあ今鏡に向かつて俺はどんな俺なんだよ！って言うか、お前は俺って、お前明らかにジャイアンシンドロームだろ！なあ！大体、こんなの意味解んねー……」

……
《ごちゃごちゃうっせーよ！！黙れカス！良いか？今から俺がガキでも解るほど、解りやすく説明してやる。……お前、ドッペルゲンガーって知ってるか？》

……
「カスって何だよ俺のクセに！……ドッペルゲンガー？聞いた事しかねえけど、確かもう一人の自分とかいう？アレ見たら死ぬんじゃないかって……って、まさか俺死ぬのか！？」

……
《さっきからうっせえよ、最後まで聞いてから喚けカス。厳密に言うとドッペルゲンガーでは無いんだけど、簡単に言うと、その兄弟みたいなものだ。だから、死んだり何だりって事は無いから安心しろ》

……
「何だ、死なねーんだ。先にそれ言えよ馬鹿。」
僕は苦笑する。

……
《お前が勝手にギヤーギヤー喚いたんだろーが、責任転嫁って言うんじゃない？確かそういうのって》
……

「知らねえよ、いちいち」

僕は、はぐらかす。

「っていつか…何で目に映って見えんの？何でこのタイミング？コ
ンタクト取ってきたのは何する為なんだ？」

僕が突然畳み掛ける様に質問すると、そいつは急に真面目な口調で
こう答え始めた。

……
《…何となく》
……

「………はあ！？何だよ、何となくって！説明になってねえんだよ、
そんなの！」

………
《馬鹿野郎！何となく、だって立派な理由なんだよ！じゃあ【ある
日第六感が俺に働いて、その知らせに従って今回接触を試みました】
こう言えばお前は満足なのかつーの！？》
………

「解った、解ったよもう！…今回このタイミングで接触してきたのは解った。じゃあ、何で目の中に居るんだ？」
あいつについて気圧されて、僕は質問を変えた。

……
《これが一番、他人からバレにくい方法だからだよ。本当は夢枕に立ったりとか、声だけ現したりとかにしなきゃなんねーんだけど…俺は、はつきり姿を現して見せた方が信用して貰えるって思ってたな。だから、姿を現す上で一番見つかりにくくて、その上比較的本人には簡単に解る方法っていうのでこの形を取った訳さ。》

「…ふーん…なんか、意外とちゃんと答えるんじゃない。てつきりまた適当に言われるかと思ってたよ。」

……
《はははは、俺だってちゃんとしなきゃなんねえ所くれー、一応弁えてるよ！》

……
そいつは意外にも、爽やかに笑って言った。

「はははは、そっか、そーいや俺だもんな、お前は。僕もつられて笑う。」

「ところでさ、何の理由で現れたんだ？後、お前に喋り掛ける時はこーやって一々声に出さなきゃなんねーの？」

……
《あ、それは頭で思ってくれりゃ大丈夫。声に出さなくてもちゃん
と聞こえるよ。何の理由でってのはなあ……まあそう急かさなくても、
いずれ解るって》

「ふーん……でも何か気味悪いな、理由解んねえと」
僕は腑に落ちないながらも、何となくそいつを信用しなきゃならな
い気がした。

……
《ところでお前、ご褒美の漫画は読まねーの？つつつても、今日が
最悪だったのはお前のせいなのにな》

……
そいつはクツクツと、小馬鹿にした様に笑った。

「黙れ！良いんだよ、理由なんてどうでも。今週号を買う事が重要
なんだって！」

僕は洗面所を出てリビングへと向かった。
リビングに入るとクーラーが随分と効いているようで、涼しくて凄
く良い感じになっていた。

「さあて、今週号は……っと。」
ソファアーにごろんと横になってページをめくる。

僕はグラビアは最後に読むタイプなので、先に目当てにしていた漫画を読み始めた。

……
「ええっ、お前グラビア読まねーの！？すげえな、超真面目じゃん！」

……
あいつが珍獣を見る様な目付きで（いや、実際は見えないんだけど、想像で）俺を見た。

「ちげーよ、俺はグラビアは最後に読むタイプなんだ。」「
面倒臭そうに僕は答えた。漫画に集中出来ないじゃないか。
それに、この癖は今までに何回も友達に聞かれてきた。
お前は面白いかもしれないが、それを聞くのはお前で百万人目なんだよ！（いや実際は何十人だけ）」

……
「ふーん……そりゃ悪かったな。さあ、俺に遠慮せずどんどん読み進めてくれたまえ」

……
そついや僕の思った事は全部筒抜けだったんだ。
なんか言い過ぎた感じがしたんだけど、所詮言った相手も僕なので、そのまま無視して読み進む事にした。

「あー、面白かった。」
読み終わると僕は、うーん、と一つ大きく背伸びをした。

……
《今週も期待通りだったな。ただ、あの読み切りの探偵ものはチンケだったけど。……まあ来週に展開あるみたいだし、それに期待すっか》

……
さすが僕だ、感想も寸分狂わない。

「ああ、そうだな。ただ最近顔変わってきたあの漫画、やっぱり俺的には前の方が好きな絵だったわ。」
手元のリモコンを押して、ニュースへチャンネルを回す。
ちょうどワイドショーの時間帯らしく、芸能人の下世話な話題が画面に映った。

「【清纯派女優に、隠された魔性の顔!?】……か。そうなんだ……結構好きだったのになあ、この女優。」

……
《コイツ、近々結婚するぜ》

……
あいつが面倒臭そうに呟く。

「……ええええっ!?マジで!?何で解んの!?!」
僕は物凄く大きな声で叫んだ。

……
《今、生放送でインタビューしてたろ。だから解んだよ、コイツの未来。》

……
そいつは当たり前前の様に、さらっと言っただけだ。

「未来が解るって、マジで言ってるの！？何で！？」
僕は凄い勢いで噛み付く。

……
《マジだよ。何でって言われても解んねえ。見えんだもん、未来が。……ちなみに、今回姿見せたのもコレが理由な》

……
そいつは更に邪魔くさそうに言った。

「未来見えんのが理由！？何だよそれ、つまり俺をどうしたいんだよ？」

訳が解らなくなってきた。未来が見えるからって、それじゃあ益々、俺に接触する理由が解んねえ。

あいつが見た未来を俺に言わせる事で、占い師としてデビューさせるとか？……でもそうしたら、あいつがさっき見てた俺の未来が変わってくるから、そいつの予言の正確性は一時的、流動的な物になつて……違つよな、そこまでが俺の未来か。アレ、もう解んねえや。

……
《ちげえよ、そんなお前に予言とかさせねえって。》

……
あいつは苦笑しながら言う。

「じゃあ、何の為に？」
僕は尋ねる。

……
《暇潰しさ》

……
そいつは意外な事を言った。

「……またそういう適当な理由かよ！お前、マジで何な訳？暇潰しで、ごちゃごちゃ人の未来を俺に囁く訳か。」
もう我慢出来ない。せつかくこいつの事を信用し始めたのに、重要な所とかは、またすぐこんな風にはぐらかすんだ。

……
《ごめん、悪かったよ。ちゃんと言うからさ。…暇潰しってのが動機の原因なのは確かに本当だけど、ちゃんと思う所があって来たんだって》

……
初めてそいつが謝ったのを聞いた。
だが、謝られても解んねーもんはまだ解らないままなのだ。

「だから、いったいどういう理由なんだよ!?! さっさと簡潔に言えよ!」

僕はソファァーに当たり散らしながら怒鳴った。

……
《だから簡単に言っとだな…そうだ。お前が何かしようとする時、迷う事あるだろ? 例えば【今日は何の服を着ようか】とか【どっちの道を通って帰るか】とかさ》

……

「そりゃ…確かに山ほどあるけど。」

……

《そういう時に、俺が最善の選択を教えてやるんってんだよ。俺だって、お前が一番良い思いをする様に生活させてやりたいからな。最終的には俺自身に返ってくる筈だし》

……

「……って事はだな。」

僕は暫く考えてから、口を開いた。考えをあいつに読まれている事をすっかり忘れて。

「俺は、お前の言う事を聞き解きゃあ、絶対損しねーって事だよな?」

僕は恐る恐る尋ねた。もしそうだったら、こんなに良い話はない。

……
《そう、そういう事。》
……

あいつは満足そうに言った。多分笑顔で言ってるんだろう。

「やったあ！それすげえじゃん！迷った時はお前に従えば絶対当たりなんだよな！？じゃあ俺、もう勝ち組決定じゃん！」
僕が跳びはねるせいで、ソファアがギシギシとうねる。

……
《あはははは、何だよ勝ち組って。……ただな、お前には幾つか気をつけて貰わなきゃなんねー事があるんだ》

……
そいつはまた真面目な口調でこっ僕を諷める。

「……………何だよ。」
僕は唾を飲み、真剣に耳を澄ます。

……
《一つは、俺はお前に最善の選択しか教えられない事。だからだなお前が勉強しなくても良い成績を取れるとか、そういう事は期待しちゃいけない。……まあ、選択問題は別としてな》

……
そいつは言う。

「うん……………解ったよ。」
内心がっかりしながら答える。

……………
《はは、がっかりすんなよ。……………で、もう一つはだな。これが重要なんだ。【俺はお前に、最善の選択を教える】という事だ。だからお前が俺を無視して違う選択をした場合【お前や関係者がどうなるかは俺は一切関知しない。】全部お前の責任だからな。俺は選択を告げただから、無視するお前が悪いんだ。解るな？》

……………
厳しい声でそいつは言った。

「……………無視すると、悪い事が起こるって事？」
背中を冷や汗が伝う。

……………
《それは解んねえ。物凄く悪い事が起こるかもしれないし、大してそこまで差は無いかもしれない。ただ、俺の言った方よりは、確実に劣る事になる》

……………
「…大丈夫だろ、だって、最善の選択を告げられてのに無視する訳ねえじゃん。」
僕は笑いながら言った。

……
《ま、普通に考えりゃそうだろうな。…お前は特に、グラビアを後に回して読めるくらいだし、その点では心配ないだろ》
……
そいつも明るい口調で返す。

「え？グラビアが何だった？」

……
《何でもねえよ、単なるこっちの話だ。》

……
素知らぬ顔で言う。

僕は立ち上がり、洗面所へ移動した。顔を鏡に近付け、さっきと同じ様に左目を覗いた。

「…まあ良いや。じゃあ、とにかくこれから宜しくな。」
僕は笑顔で言う。

……
《こちらこそ、宜しく》

……
瞳のなかの僕は、両手で大きな丸を作りながらこう答えた。

何となく、凄く仲の良い友達が出来たみたいな感覚だ。
僕は何だか凄く嬉しくなって、うきうきしながらリビングへと戻った。

あいつの話に集中するために消したテレビを、もう一度点け直す。

……すると、大きな見出しで先程インタビューを受けていた女優の結婚が報道されていた。

僕は口をあんぐりと開け、テレビを凝視する。

……
《……な？言ったる？》

……
あいつの勝ち誇った様な声が、頭の中で響いた。

第1話：【起】（後書き）

お読み戴き有難うございます。私はグラビアは殆ど読みませんが、こないだのしよこたんのイラストは流石と言うか、グロかったですね。早く百見様をお迎え出来るよう精進して参りますので、どうか宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8044c/>

ドッペルゲンガー

2010年10月28日02時58分発行